がんサバイバーシップ　Cancer Survivorship

私ががん治療に携わるようになって 30 数年が経ちました。その間に多くのがん患者さんとその家族との出会いがあり、がん治療にまつわる様々な経験をしました。がん治療では、がんの治癒・救命が最大の目的・目標（勿論、現在でも同様ですが）で、患者本人やその家族も同じであったと思います。そしてその目標に向かって全身全霊で尽くしてきましたが、残念ながら進行がんの多くは治癒することはありませんでした。その後、がん生物学の発展と再建外科、化学療法、画像診断など医療技術・機器の進歩と相まって、がん全体の治療成績の向上、特に進行がんの治療成績の向上が著明になりました。その結果、がんの生存者(Cancer survivor)は次第に増え、その生存期間の延長もみられるようになってきました。自身ががんサバイバーである F. Mullan 博士は生存に 3 つの期間があると定義しました。第 1 は急性期生存（診断、告知、検査、治療）、第 2 は延長生存期（回復、経過観察、再発監視）、第 3 は恒常的生存期（がんに対する感心が低下）です。

がんサバイバーシップは、「がんの診断や治療を受けた後に患者本人やその家族が生きていく過程のすべて」を意味します。がんの治療技術が進歩し、がんが「長期間つき合う慢性疾患」に変化している現在、がん医療の最終目標は単に「生存・救命する」から「治療後も充実した社会生活を送る」ことに大きく変化してきています。そのために医療担当者には、患者の社会生活全体に及ぼす、がん治療の様々な影響（合併症および晩期障害、二次がんの発生、経済的問題、就労、がん偏見などの心理社会的問題）を認識し、その影響をできるだけ軽減させる取り組みが求められています。